

# 国会事故調「東電福島原発事故」調査報告書を 報告書の書き方の観点から検討する

綾 皓二郎

Email: aya@isenshu-u.ac.jp

石巻専修大学 理工学部基礎理学科

◎Key Words マインドセット, 規制の虜, 日本文化, メディア・リテラシー, 黒川 清

## 1. はじめに

『国会事故調報告書』は、2011.3.11 に起きた東京電力福島第一原子力発電所事故の原因究明のための調査・提言を行うために、憲政史上初めて国会に設置された調査機関（国会事故調）による報告書である。<sup>(1)</sup> 国会宛の文書ということは、主権者である国民に向けた文書である。事故の深刻さと影響の大きさを考えると、第一級の歴史的な文書となりうるものであり、100年後の評価に耐えられるものでなければならない。また、この調査結果と教訓は世界中で共有されなければならない性質のものである。3.7億円という巨額な予算の下での黒川 清委員長他9人の委員、3人の参与、5人の査読者、2人の事務局のメンバーにより作成されたものである。この論文では、上述のことを踏まえて、国会事故調の『報告書』（冊子版・PDF版・HTML版の日英版のすべて）を報告書の書き方およびメディア・リテラシーの観点から検討する。ただし、事故原因・調査結果の工学技術的議論の検討には立ち入らない。

## 2. 報告書の形式の問題点

### 2.1 『報告書』作成の責任の所在

『報告書』作成の責任の所在が不明である。黒川委員長を含む20人のメンバーの任務と責任の範囲が明確でない。誰が『報告書』の編集責任を負うのか。査読者は何を査読し、どのようなコメントを出したのかが分からない。翻訳の問題もある。誰が英訳し、翻訳された文書の責任は誰が負うのか、たとえば、委員名のある英訳文に問題があった場合には、それは本人の責任かどうか、が明らかではない。

英語版については、Executive summary を読むと、日本語が読めない人々のための便宜のためだけに英語版を作成したとあるが、英語版は、調査結果と事故原因の教訓を世界中で共有するために作成するものであったはずである。

### 2.2 『報告書』の提出年月日

この公式の『報告書』には、国会への提出年月日

が表紙に明記されていない。Web ページには“平成24年7月5日に報告書を国会の両院議長に提出しました”とある。冊子版では奥付に小さく書いてある。

『報告書』に収められている、10人の委員が自署して両院議長に宛てた、調査終了の手紙にも日付がない。手紙には“昨年12月8日、・・・調査活動は本日終了し、”とあるが、本日終了とはいつのことか、分からない。英語版の手紙にも同様に提出の年月日はない。『スリーマイル島原発事故大統領委員会報告書（ケメニー報告）』<sup>(2)</sup>の大統領宛の手紙には、きちんと日付が入っている。

国の公式文書である『報告書』の表紙と手紙に提出年月日を入れなくて、国内外に公開し配布してよいものか。後世の人は、いつ書かれた手紙かわからない文書を読まなければならないのである。

### 2.3 序文、メッセージ、Preface

- 『報告書』には「前書き」といえるものが日本語版・英語版を合わせて多数あるので、まとめて『序文』としておく。本編（英語版 Main Report）には
- ①[日本語版]: 委員長の日本語版「はじめに」（2011.7.5, Web ページでは「委員長メッセージ」）
  - ②[翻訳版]: 「はじめに」の翻訳英語版（2012.10.17）  
「Preface from the Chairman」
  - ③[付録5版]: 日本語版「付録5 委員長と9人の委員からのメッセージ」
  - ④[付録5 翻訳版]: [付録5版]の翻訳英語版「Preface」  
要約版（英語版 Executive Summary）には
  - ⑤[日本語版]: 委員長の日本語版「はじめに」（①と同じ）
  - ⑥[英語版]: 「Message from the Chairman」（2011.7.5, Web ページでは「Chairman's message」, この翻訳日本語版はない）。

『序文』には表現や見解に一貫性がなく、読者の頭は混乱する。特に、[日本語版]①、⑤と[英語版]⑥の見解は別物といえるほど異なる。

また、Main Report には二つの Prefaces がある。「Preface from the Chairman」と[付録5 翻訳版]

という「Preface」である。委員長が『報告書』の冒頭で Preface を書くのは当然としても、その後に委員長が再び Preface を書き、さらに残りの委員全員も Preface を書くものか。[付録5版]が「後書き (Postface)」として書かれたものであることは、付録であること、また田中三彦氏のメッセージを読めば分かる：“ガス抜きもかねて、貴重なスペースを使って、雑感を二つ書き留めておきたい。” なお、[付録5 翻訳版]では同氏の題目のみ Comment by committee member となっていて、英訳されていない（しかも無冠詞）。以上のように『報告書』特に Main Report には編集者の不在を推察させるものが少なくない。

## 2.4 序文の書き方

報告書の序文では、通常、報告書を書くにいたった経緯や方針、目的、分析や議論すべきこと、報告書の構成などを書く。序文において本論での結論を紹介することもあるが、この『報告書』の『序文』では、[本論]で分析や議論をしていない、委員長個人の意見や感想が整合性なく書かれている（後述）。

## 2.5 『序文』の段落・パラグラフ

『序文』では段落の概念が曖昧である。改行を段落の終りとするか／しないのか、段落と次の段落の間に空白行を置くか／置かないのか、ということがある。さらに問題なことは、パラグラフ・ライティングがなされていないことである。そのため、きわめて分かりにくい『序文』となっている。段落数と段落あたりの文の数を調べると、[日本語版]は、段落数が13で、段落あたり3文となっている。「人災」という最も重要な言葉が出るのは第8段落であることが示すように、前置きが長く冗長といえる。[英語版]はパラグラフ数が15で、パラグラフあたり2文である。英語読者のことを考えたのか、第1段落に最重要語の「manmade disaster」をもってきている。このように[英語版]と[翻訳版]ではパラグラフ・ライティングをしていないので、英語読者には非常に読みづらく、論理を追うことに苦労する。たとえば、[翻訳版]の第1パラグラフは、主題文を提示するだけで終わっていて、展開文がない。

## 3. [日本語版]の作文技術的問題

[日本語版]は曖昧な記述が多い。しかも、論文の序文のような書き方をしていないので、論理に飛躍があり、分かりにくい。また、翻訳されることや、普通の国民、100年後の子孫が読むことを意識して注意深く書かれていない。たとえば、

- ・重要な用語（キーワード）が説明されていない。

- ・事実について正確な記述がなされていない。
- ・段落間と段落内では文の間で、繋がりが弱い。
- ・段落や文の位置を入れ替える必要がある。
- ・原子力という用語を多義的に使用しているので、語句を補わないと、分かりにくい箇所が多い。

次に、主な問題箇所を段落ごとに見ていくことにする：原文→訂正語句とする。

- ・第1段落  
福島原子力発電所 → 福島第一原子力発電所（原発）。最初に事故の発生日月日 2011.3.11 を正確に書くべきである。
- ・第3段落  
事象が起きた時系列の順に書いていないので、分かりにくい。1970年代のオイルショック → 1973年の第一次オイルショック
- ・第4段落  
“巨大で複雑なシステムであり、その扱いは極めて高い専門性、運転と管理の能力が求められる”の主題は、原子力ではなくて原子力発電所である。
- ・第5段落  
第1文と第2文との間に逆接の接続詞を入れないと、2つの文が密に繋がらない。
- ・第6段落  
3.11の日を → 2011.3.11の東日本大震災を
- ・第7段落  
重要な専門用語である「規制の虜 (Regulatory Capture)」と「思いこみ (マインドセット)」には、長い修飾語句は付いているが、言葉の説明自体をしていないので、非常に分かりにくい。
- ・第8段落  
原子力のシビアアクシデントにおける心の準備 → 原子力発電所における過酷事故に対する準備  
危機管理能力を問われ → 危機管理能力を発揮することができず  
責任感の欠如 → 責任感の欠如、および職務上の過失と怠慢があった。（「人災」という以上は、責任感の欠如だけではすまない。怠慢という言葉は[日本語版]にはないが、[英語版]では3回も出る。）
- ・第9段落  
この調査委員会 → 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会（国会事故調）  
誕生した。 → 誕生した（2011年12月8日）。
- ・第9段落、第10段落  
段落の位置が不適切、前段に移す。段落と段落の間、段落内の文と文の結合が弱く、記述に大きな飛躍がある。説明が足りない。
- ・第11段落  
説明が足りない。リーダー像を示したいのであれば、明示的に書かねばならない。<sup>(3)</sup>

#### ・第13段落

“子どもたちの生活が一日でも早く落ち着かれることを心から祈りたい”という、自発の助動詞を用いる言い方は適切とはいえない。子どもたちの生活が一日でも早く元の落ち着いたものに戻れるようにするのが大人の責任というものである。

以上のように、[日本語版]には語句を補ってやらないと分かりにくい箇所や不正確な箇所が多いが、[翻訳版]では、いくつかの箇所語句を追加して外国人に分かりやすいよう改めている。

#### 4. 『序文』の批判的検討

事故の根源的原因の記述を中心にして、メディア・リテラシーの観点から『序文』を批判的に検討する。主な問題点は、次のとおりである。

(1) 『序文』での事故の根源的原因に関する黒川委員長の見解は首尾一貫していない。特に[日本語版]と[英語版]との間、それらと[本論]との間の見解の違いが別物といえるほど甚だしい。

(2) [英語版]と[付録5 翻訳版]での「mindset」に関する主張の違いが大きく、理解が困難である。

(3) 『序文』に、[本論]で議論されていない、委員長の個人的見解を述べることは許されるか。

##### 4.1 [日本語版]、[英語版]、[本論]の比較検討

[日本語版]では根源的原因を曖昧にしている。第7段落で、根源的原因は日本が高度経済成長を遂げたところまでに遡るとは言っても、根源的原因が「規制の虜 (Regulatory Capture)」あるいは「思い込み (マインドセット)」であるとは明示的に述べていない。なお「規制の虜」や「マインドセット」のような専門用語を説明もなしに用いることは、国民の理解を求める報告書としては避けるべきことである。

mindset は、mind の集合 (set) であるから、心的態度、思考様式と訳せる。思いこみは、『ケメニー報告』で "The most serious 'mindset' is the preoccupation of everyone with the safety of equipment" とあるように、マインドセットの一つの要素である。「思いこみ (マインドセット)」という書き方は、誤解を与える。

[英語版]では「思いこみ」は訳さず「mindset」単独で5回も使われている。「mindset」と事故との関連については、次のように述べている。It was this mindset that led to the disaster at the Fukushima Daiichi Nuclear Plant. 他方で[付録5 翻訳版]では、One could say the true cause of the accident lurked in the "mindset" , [付録5版]では、「思いこみ (マインドセット)」の中にあつたのかもしれないとある。すなわち、[英語版]では強調構文を使っ

てマインドセットが事故原因だったと断定しているが、[付録5 翻訳版]では仮定法を使ってマインドセットは事故原因かもしれないと他人ごとのように言っている。委員長の重要な事故原因に関する、この表現の違いをどのように理解すればよいのだろうか。

[英語版]では、事故の根源的原因は「日本文化 (Japanese culture)」の根深い因習である

- ・ 反射的な従順さ
- ・ 権威を問い質すことへの躊躇
- ・ 決まった計画をやり通すことへの執着
- ・ 集団主義
- ・ 島国根性

中に見出されるとし、「Made in Japan」の事故だと認めなければならないとしている。しかし、[日本語版]と[本論]には、事故原因が「日本文化」や「メイド・イン・ジャパン」であるとは、どこにも書いていない。これらの言葉が見いだせないのである。

[本論]では第5部での詳しい議論を受けて結論部で、事故の根源的原因は、「規制の虜」という組織的、制度的問題が引き起こした「人災」であると断定している。しかし[英語版]では「規制の虜」という言葉はどこにも出てこない。しかも[本論]では「マインドセット (思いこみ、常識)」は結論部の1箇所ではしか触れられておらず、これが根源的原因と断じているわけではない。

国民と世界中の人々は、上述の見解と表現の食い違いをどのように理解すればよいのだろうか、どれを委員長の見解とみなせばよいのだろうか。

なお「規制の虜」は、米国製の経済学用語 (概念) で、1971年頃から米欧の規制当局に広く認められてきた事象であって、日本に特有な現象ではない。

##### 4.2 『報告書』における正文

Web ページには、『報告書』で“日・英で齟齬があった場合は、日本語版が正文となります”とある。[日本語版]と[英語版]は、齟齬があるどころではなく、まったく別物といってよい代物である。<sup>(4)(5)(6)</sup> それでは、正文ではない[英語版]は何のために提供されたのか。日本語が読めない世界中の人々の便宜のためだけに、[日本語版]と別物の[英語版]を提供してよいものか。[英語版]では、事故の根源的原因は日本文化にあるなど、便宜を超えた記述がされていることは許されるのか。このような情報操作がなされて、複雑怪奇ともいえる『報告書』が世界中に出回り、後世に残されることでよろしいか。

##### 4.3 『序文』における個人的見解の表明

[日本語版]では、抜本的に改革するものとして、政府をはじめ、原子力関係諸機関、社会構造や日本

人の「思いこみ (マインドセット)」を挙げている。このように、社会構造一般、さらには日本人の思考様式までを改革の対象とするなら、[本論]で詳細に論述し具体的な改革案を提示すべきであるが、それがまったくない。提言にも盛り込まれていない。

原発の事故原因を、「日本文化」や日本人の「マインドセット」に帰し、日本特有の「人災」、「メード・イン・ジャパン」とすることは、事故の責任を負うべき組織や個人を曖昧にしてしまう働きをする。また、事故の本質と教訓を世界に誤って伝えることになる。事故の教訓が世界中で共有されず、同じような重大な事故が繰り返される恐れがある。(4)(5)(6)

委員長の主張は、委員会設置の基本的考え方の③ 世界全体として原発事故再発防止のため、世界的視野に立つことを重視することに反しているといえる。

#### 4.4 『報告書』から読み取れる思考様式

##### (1) 島国根性

国の公式な文書である『報告書』の[日本語版]と[英語版]でまったく異なる情報の提供は許されるか。(6) これでは日本人と外国人は共通の土俵で議論できないではないか。日本語版は日本人向け、英語版はグローバルな読者向け、(5) 読み手の違いに応じて『報告書』のメッセージに手を入れるのは妥当と考えることこそ、「島国根性」と批判された。

##### (2) 思いこみ

[日本語版]と[英語版]で内容と見解は異なっており、日本人なら日本語版を読めば分かる、日本人に[英語版]の理解は無理ではないかとの黒川委員長の発言は、「思いこみ」に過ぎない。

##### (3) 責任の所在の曖昧化

[英語版]では“最も重要な教訓は、一人ひとりの日本国民がきわめて深刻に反省すべきことである”など、原発事故について、先の敗戦と同じく1億総懺悔すべきと繰り返し言っているが、これは[日本語版]にはない。このような発言は事故の本当の責任者を曖昧にする議論である。原発を推進した者と地域振興の名目と安全神話の下で原発を受け入れざるをえなかった者とは、明らかに責任の大きさは異なる。また「1億総懺悔論」は、原発に反対してきた少なからずの人々の存在と活動を軽んじている。

##### (4) 不透明性

『報告書』作成の責任の所在が曖昧で不透明である。また[日本語版]と[英語版]で内容と見解がまったく異なることを読者から指摘されるまで黙っていたというのでは、透明性にまったく欠ける。[英語版]という“最高水準の透明性を満たす報告書”とは到底いえない。報告の透明性といいながら、[日本語版]

と[英語版]を内容のまったく異なる別物にしたことは、意図的に情報操作をしていると指摘せざるを得ない。

##### (5) 決まった計画をやり通すことへの執着

「日本語版」と[英語版]の記述の重大な食い違いを、訂正すると発言しておきながら、(7) 未だに訂正しないのは、日本文化の因習の「決まった計画をやり通すことへの執着」を自ら示すことに他ならない。

#### 4.5 『ケメニー報告』との比較検討

『報告書』と『ケメニー報告』は酷似している。これは黒川氏自身が認めている。(5) しかし、『ケメニー報告』は米国政府や社会構造、アメリカ人の「マインドセット」を改革する必要があるとか、アメリカ人一人ひとりが原発事故について深く反省しなければならないとは述べていない。言っていることは、Fundamental changes will be necessary in the organization, procedures, and practices and above all in the attitudes of the Nuclear Regulatory Commission and of the nuclear industry. である。

#### 5. おわりに

この論文では、権威を問い質すことに躊躇しないで、メディア・リテラシーの観点から『報告書』を批判的に読み解くことを試みた。その結果、この『報告書』には形式ばかりでなく内容においても、見落としや誤解を招く箇所が多数あるほか、『序文』の見解に一貫性を欠くなどの様々な問題点があることが分かった。国民と子孫、世界の人々のために、『報告書修正第2版』を速やかに作成することが望まれる。

#### 参考文献

- (1) 国会：“国会事故調報告書、徳間書店 (2012) PDF 版、HTML 版は、下記から入手できる。  
<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3856371/naic.go.jp/index.html>
- (2) J.G.Kemeny: Report of the President's Commission on the Accident at Three Mile Island,  
[www.threemileisland.org/downloads/188.pdf](http://www.threemileisland.org/downloads/188.pdf)
- (3) 朝日新聞：原子力とリーダー論 2012.8.19
- (4) 英フィナンシャル・タイムズ：福島原発事故は「日本製」の危機 2012.7.6
- (5) 竹田圭吾：国会事故調「日本文化論」についての一考察 竹田圭吾 blog. 2012/07/12
- (6) 福本容子：原発事故は文化のせい？ 毎日新聞 2011.7.20
- (7) 朝日新聞：事故はメード・イン・ジャパン 2012.7.7